



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 39

Nov. 2010

<会費納入の時期です>

- ・会費は前納制です。2011 年度会費は 2010 年 12 月末までにお納めください。

目 次

会長および評議員選挙の結果.....	2
評議員追加選出結果について.....	2
次期の庶務幹事, 会計幹事, ニュースレター幹事.....	2
諸報告	
2010 年度野外研修会実施報告.....	3
"花野" というものを知る.....	5
第 3 回日中韓合同植物分類学シンポジウム 報告.....	7
第 3 回日中韓合同植物分類学シンポジウムに参加して.....	7
第 3 回日中韓合同植物分類学シンポジウムの感想.....	8
庶務報告 (2010 年 8 月~ 10 月).....	8
お知らせ	
日本植物分類学会第 10 回大会, 2011 年度総会, および East Asian Botany: International Symposium 2011 のご案内.....	8
2010 年度日本植物分類学会講演会のご案内.....	12
会費納入のお願い.....	14
本の紹介	
身近な草木の実とタネハンドブック.....	14
研究での失敗談	
横田先生の体験談を読んで (1966 年・西表横断の思い出).....	15
いきもの便り	
北硫黄島のコケ.....	18
日本植物分類学会第 10 回大会「発表・参加申込書」.....	19
会員消息.....	20

会長および評議員選挙の結果

選挙管理委員長 高宮 正之

日本植物分類学会ニュースレター No. 38 で公示した日本植物分類学会会長および評議員選挙の開票結果についてお知らせします。

開票は2010年10月8日(金)、熊本大学理学部3号館D312高宮研究室において、午前11時より本学会会員の副島顕子、藤井紀行氏の立会いのもとで行われました。

投票数が前回選挙より5票減ってしまいました。選挙管理委員長として周知に問題があったことを反省させられました。なお、票に名前の挙がった方は会長・評議員それぞれ27名・149名で、票が割れる結果となりました。ここ数回の投票数は、2004年113票、2006年101票、2008年79票と減少気味です。2年後の選挙では、〆切一カ月前ぐらいにメーリングリストで投票を促すなど、投票率の向上を図る必要があります。

【会長】

当選 戸部 博 13
次点 村上 哲明 9
(有効投票数 74票)

【評議員】

当選 西田 佐知子 23
村上 哲明 18
副島 顕子 17
瀬戸口 浩彰 16
遊川 知久 16
藤井 伸二 16
角野 康郎 15
藤井 紀行 15
次点 五百川 裕 13
海老原 淳 13
梶田 忠 13
高宮 正之 13
綿野 泰行 13

(有効投票数 74票)

評議員追加選出結果について

次期評議員 西田 佐知子

選挙管理委員長の報告にありますように、次期評議員として8名(角野 康郎、瀬戸口 浩彰、副島 顕子、西田 佐知子、藤井 伸二、藤井 紀行、村上 哲明、遊川 知久)が選挙により選出されました。「役員等の選出についての細則」第4条の規定に基づき、この8名の合議により次の4名の方を次期評議員として追加選出しましたのでご報告いたします。

秋山 弘之、五百川 裕、大村 嘉人、仲田 崇志

次期の庶務幹事、会計幹事、ニュースレター担当幹事

庶務幹事 東 浩司

次期の学会事務局は、庶務幹事を大阪府立大学の西野さんが、会計幹事を国立科学博物館の保坂さんがお引き受け下さることに、そして、ニュースレター幹事は私が担当することになりました。これに伴い、2011年1月1日より学会事務局の連絡先、会計連絡先が次のとおり

変更になります。お間違えのないよう、ご注意ください。

事務局・庶務幹事（会務全般）

西野 貴子（にし の たかこ）

〒 599-8531 堺市中区学園町 1-1 大阪府立大学大学院 理学系研究科

電話&ファックス：072-254-9754

電子メール：nishino@b.s.osakafu-u.ac.jp

会計幹事（入会申し込み，住所変更，退会届，会費納入，購読申し込みなど）

保坂 健太郎（ほさか けんたろう）

〒 305-0005 つくば市天久保 4-1-1 国立科学博物館 植物研究部

電話：029-853-8967 ファックス：029-853-8401

電子メール：khosaka@kahaku.go.jp

ニュースレター担当幹事（ニュースレター原稿送付先）

東 浩司（あずま ひろし）

〒 606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学理学研究科 生物科学専攻 植物学系 植物系統分類学学科

電話&ファックス：075-753-4125

電子メール：azuma@sys.bot.kyoto-u.ac.jp

諸報告

2010 年度野外研修会実施報告

藤井 紀行（熊本大学）

今年度の野外研修会は、「阿蘇の草原植物と菊池溪谷の植物」と題して、8月20日（金）～22日（日）の3日間、熊本県の阿蘇地域において、草原植物の観察を中心に行った。現地では阿蘇において長年、草原再生事業に携われてきた瀬井純雄氏（NPO 法人阿蘇花野協会）に案内していただいた。参加者は受入スタッフの高宮正之氏・副島顕子氏（熊本大）を加えて、計22名であった。

第一日目（8月20日）は、JR熊本駅、熊本大学、熊本空港において参加者をピックアップし、阿蘇方面へ向かった。参加者は主に関東地方や関西地方から集まったが、近隣の福岡県からの参加もあった。今回はマイクロバスを借りる予定であったが、バス会社の都合で大型バスとなり、移動は比較的快適であった。熊本空港を出発し、県道28号線を東に

進み、俵山峠を通過すると、雄大な阿蘇五岳を眺めることができた。久木野の「あそ望の郷くぎの」においてトイレ休憩し、午後3時半ころには当日の宿泊地である南阿蘇国民休暇村（高森町）に到着した。その後、休暇村から歩いて5分くらいの所にある「南阿蘇ビジターセンター」に向かった。センター内で阿蘇の自然や歴史を紹介するビデオを鑑賞した後、センターに併設されている阿蘇野草園において植物の観察を行った。野草園では阿蘇の主要な植物が植えてあり、野生状態ではないが、ヒゴタイやヤツシロソウなどを見ることができた。その他、ツクシフウロ、シオン、シデシャジン、コウライトモエソウ、ツクシトラノオ、オオヒナノウスツボ、キセワタ、フジカンゾウ、ハガクレツリフネソウ、クサアジサイなどが咲いていた。休暇村に戻っ

た後は、夕食と入浴を済ませ、午後8時から瀬井純雄氏によるスライド上映会が行われた。阿蘇で見られる興味深い植物の解説だけでなく、草原植物が現在危機的な状況にあることが示された。阿蘇高森町の小学校の生徒数が、近年激減しており、草原植物とともに人もいなくなってきたという現実はとても考えさせられた。

第二日目(8月21日)は、午前8時にホテル前に集合し、阿蘇五岳の一つである根子岳をバックに記念撮影し(図1)、最初の目的地であるNPO法人阿蘇花野協会のナショナル・トラスト地「Pro Natura Reserve」へ向かって出発した。現地では、瀬井氏によりトラスト地の歴史的な経緯や草原再生の現状について説明がなされた後、実際に草原の中を散策しながら植物採集を行った(図2)。このトラスト地は瀬井氏が発起人となって土地を買い取り、ボランティアの力も借りて草原を再生している場所である。ススキがうっそうと生い茂る中に、オミナエシやカワラナデシコ、ヤマハギといった秋の花々が咲いていた。その他、アソノコギリソウ、シラヤマギク、ホソバオグルマ、ツクシアザミ、ツクシトラノオ、ナンバンギセル、ヤツシロソウ、タチフウロ、ミツバグサ、ヒメユリ(実)、ホソバシュロソウ、キツネノカミソリなどを観察することができた。その後、道の駅「波野」において昼食を取った後、財団法人阿蘇グリーンストックが所有するトラスト地を訪問した。ここは環境省も関わって草原再生のための試験地として



図1. 根子岳をバックに参加者全員で記念撮影。



図2. NPO法人阿蘇花野協会のナショナル・トラスト地における観察会の様子。

も利用されていた場所である。JR豊肥本線の波野駅の近くにあり、観察会の時にちょうど九州横断鉄道の真っ赤な列車が通過した。参加者の中には鉄道がお好きな方が多かったようで、列車の写真をたくさんカメラに納められたようである。トラスト地は観察用に小道が切り開かれており、歩きやすかった。試験地として利用されていた場所は特に一面のお花畑であった。ノヒメユリ、サイヨウシャジン、ヒメノダケ、タカトウダイ、ヨシ、ワレモコウ、ケショウヨモギ、サワヒヨドリ、シオン、オオユウガギクなどを観察することができた。次の観察地は、波野駅近くのトラスト地から数km西に移動したところである(ここもグリーンストックのトラスト地)。この場所では野生のヒゴタイを見ることができた(図3)。草原の中にあると意外に目立たないが、近づ



図3. ヒゴタイ (*Echinops setifer* Iljin)。

いて見ると巨大な花序と濃い紫色の花で強烈な存在感をもって鎮座していた。ここでも上で列記したような植物をみる事ができたが、その他にもアキノキリンソウ、ハバヤマボクチ、ヤナギアザミ、ヒメアザミ、タムラソウ、ヒメヨモギ、ホタルブクロ、ウメバチソウ、コウライトモエソウ、コバギボウシ、ユウスゲ（実）などを見ることができた。帰り道、観光地として有名な「大観峰」に寄ってから当日の宿泊地である内牧温泉へと向かった。大観峰からは阿蘇五岳の山々や阿蘇谷の美しい田園風景を堪能することができた。また植物も阿蘇では北外輪方面でしか見られないノヤナギやマルバハギ、ツクシゼリを観察することができた。その晩、内牧温泉では大広間において懇親会が開かれた。阿蘇の美味しい郷土料理の数々にお酒もすすんで様々な話で盛り上がった

第三日目（8月22日）は、内牧温泉から北外輪山を越えて、菊池渓谷へ向かった。菊池渓谷は菊池川上流の渓谷であり、モミヤツガといった針葉樹やケヤキなどの広葉樹の原生林で覆われている。渓谷沿いという環境から大木の樹皮にはコケや着生シダなどがびっしりと生えており、阿蘇の草原とはまったく異なった環境での観察会となった。菊池渓谷における植物観察は、シダ植物を専門に研究されている高宮先生にお願いした（図4）。シダ植物では、アオホラゴケ、シノブ、トキワシダ、イワヤシダ、キヨタキシダ、ホソバイヌワラビ、ヒロハイヌワラビ、ミドリカナワラビ、

ツクシオオクジャク、ツクシイワヘゴ、イノデモドキ、カタイノデ、ヤノネシダ、アオネカズラ、ツクシノキノブなどを観察することができた。シダ植物以外では、オオバヨメナ、スズムシバナ、イワタバコ、ミヤマミズ、ムカゴイラクサ、オトギリソウ、クロタキカズラ、ポタンヅル、冬虫夏草数種を観察することができた。広河原において軽い昼食を取り、記念撮影をしてから帰路についた。午後1時には菊池渓谷を離れ、旭志村の道の駅「ほたるの里」で休憩した後、電車で帰る組はここで別れた。その後、熊本空港で飛行機組の方々と別れ、最後熊本大学で自動車組の方々と別れて解散となった。

本研修会参加者は以下の通りである（敬称略、五十音順）：井上 哲也、宇那木 隆、織田 二郎、黒岩 展子、黒崎 史平、古賀 佳好、瀬井 純雄、副島 顕子、高宮 正之、田村 実、内藤 宇佐彦、中村 建爾、中村 直樹、中村 僉雄、西野（中山） 友子、橋本 光政、長谷川 義人、長谷部 光泰、藤井 紀行、布施 静香、山住 一郎、吉田 國二。



図4. 菊池渓谷における観察会の様子。

“花野” というものを知る

布施 静香（兵庫県立人と自然の博物館）

今年は猛暑。うだるような暑さの中、大阪伊丹空港を出発。熊本空港に到着した最初の感想は「関西よりも涼しい！」。日差しは強いものの、吹く風からは秋の気配が感じられました。

ご準備いただいた大型バスに乗って、南阿

蘇ビジターセンターへ。展示室や野草園で草原植物を予習。研修会に参加されていた多くの大先輩方から植物のご教示をいただきつつ、ゆったりとした時間を過ごしました。夜は瀬井純雄氏によるスライド上映会。ここでは、阿蘇の草原植物がどのような場所に生育して

いるか、また保護の為に何をされているのか等を学びました。私にとって阿蘇のイメージは広々とした草原。しかし、その草原は、放棄地・植林地の増加により多くが消えたこと、また、草原は、採草地・茅野・放牧地から成っていて、中でも大陸系遺存植物の主な生育地である採草地は消滅しつつあることを知りました。瀬井氏らは放棄地を取得して草原性植物の保護を進めておられますが、その活動は、野焼き・草刈り・草集めといった人手と技術が必要な大変な作業でした。講演のしめくりは、「(阿蘇周辺地域の人口減少により)阿蘇の草原は消滅する」というショッキングなもので、維持の難しさを改めて感じました。

2日目は瀬井氏らが管理されているナショナルトラスト地で植物を観察しました。百聞は一見に如かず。これが「花野(はなの!)」とその見事さに大感激しました。花野とは、春ではなく秋の草原に咲く花々を表現したことば。瀬井さんらによって再生された見事なお花畑を目の前にして思わず万葉の時代にまで思いを馳せてしまいました。瀬井さんらの言う「再生」とは、人の手によって増殖し「里帰り」させたものではなく、昔に習って野焼きをし、草刈りし、草集めをすることで実現されるものだそうです。その結果、細々と生きながらえていた株や埋土種子から、見事な秋のお花畑が形成されていました。今回見られたのは、ヤツシロソウをはじめオミナエシ、カワラナデシコ、クサフジ、サイヨウシャジン、シオン、シロヤマギク、タチフウロ、タムラ



図1. ヤツシロソウ。



図2. 花野に咲くノヒメユリ。

ソウ、ツクシトラノオ、ツルフジバカマ、ヒゴタイ、ノヒメユリ、ホソバシュロソウ、ミツバグサ、ワレモコウなど色とりどりの美しい花々でした。

3日目は第一種特別保護区の菊池溪谷へ。細かな水しぶきが靄のように水面上を覆っていて、溪流際の樹々に様々なシダ植物が着生していました。ここでは採集を慎み、カメラを片手に植物談義に花を咲かせました。

最後に、色々とお気遣いくださった世話役の熊本大学の藤井紀行先生・副島顕子先生・高宮正之先生、ご講演やナショナルトラスト地をご案内くださった瀬戸純雄先生をはじめ、この研修会にかかわられた多くの方々に感謝いたします。



図3. 菊池溪谷。

第3回日中韓合同植物分類学シンポジウム 報告

シンポジウム組織委員 村上 哲明

第3回日中韓合同植物分類学シンポジウム「East Asian Plant Diversity and Conservation 2010」が8月20～21日の期間、韓国のソウル大学（Seoul National University）を会場として開催された。この合同シンポジウムは、第1回は一昨年夏に札幌で、そして第2回は昨年秋到北京で開催されたものである。今回の第3回合同シンポジウムでは、日中韓の中堅研究者の口頭発表16題（各30分）、若手の口頭発表&ポスター発表9題（口頭発表は各5分）、一般のポスター発表58題があり、参加者も100名を超えて大盛況であった。日本からも戸部博会長を含む13名が参加して発表を行った。

シンポジウムでの発表を聞いてみると、中国や韓国では、アメリカ顔負けの大規模な植

物の分子系統解析プロジェクトやDNAバーコーディング・プロジェクトなどが精力的に進められており、少なくとも産出するデータ量において日本は既に追い越されていることを強く感じた。さらに中国や韓国の若手研究者がとても意欲的であることも強く印象に残っている。日本からは、伊藤優（東京大）、三井裕樹（京大）、須貝杏子（首都大）の3名が若手研究者フォーラムで発表し、韓国、中国の若手と親交を深めていた。

次回第4回は、来年（2011年）3月に開催される日本植物分類学会の年次大会（つくば）の期間中に開催される予定となっている。私は第4回の実施責任者として、さらに充実した日中韓合同シンポジウムにしたいと考えている。会員の皆様のご協力を是非、お願いしたい。

第3回日中韓合同植物分類学シンポジウムに参加して

須貝 杏子（首都大学東京）

私は、先日ソウル大学で開催された第3回日中韓合同植物分類学シンポジウムに参加させていただきました。研究に関することで外国へ行くのは初めてのことで、さらに英語での発表も初めてだったので、申し込みをしてから行くまでは不安が募るばかりでした。けれども、シンポジウム前日に韓国に到着してからは、不安になっている暇もないスケジュールだったので、あっという間に時間が過ぎていきました。

大陸の広大なスケールでのサンプリングや大規模なプロジェクトの内容に圧倒されました。また、中国・韓国の方々には学生を含めて英語が堪能で、英語での発表の仕方など学ぶべきことがたくさんありました。そして、さらに驚いたことは韓国の方々の中に日本語の上手い方が何人もいらっしゃって、英語で話し始めたはずなのに、途中から私に合わせて日本語で話して下さり、恐縮してしまいま

した。

20日の夜には若手のための懇親会があり、韓国の学生何人かと話をすることができて、日本へ留学したいなど研究に対する高い意欲に刺激を受けました。植物の研究をしているという共通点だけで、拙い英語ながら何気ない世間話からお互いの研究の話までできると分かり、このようなつながりは素晴らしいことだと感じました。

今回のシンポジウムでは、自分自身の発表練習不足や英語力の低さなど反省することばかりでしたが、韓国・中国の方々と交流できて貴重な経験となりました。来春の分類学会中に開催される第4回のシンポジウムでは、英語での発表のリベンジのためにも精一杯努力したいと思います。最後になりましたが、3カ国の交流の場を温かいおもてなしで企画・運営して下さい。韓国の方々には心から御礼申し上げます。

第3回日中韓合同植物分類学シンポジウムの感想

三井 裕樹 (京都大学)

今回はじめて日中韓合同シンポジウムに参加させていただきました。会場のソウル大学は、ソウル市内南部、雪岳(ソラク)山の山麓に位置しているのですが、そのあまりに広大なキャンパスに驚きました。キャンパス内にはバスやタクシーが走り、職員用のマンションやレストラン、バーまであり、まるで一つの街の様相です。また期間中は、伝統的な宮廷料理をいただくレセプションに始まり、懇親会、Farewell Lunch等、至れり尽くせりの歓待を受け、主催者の方々には本当に親切にいただきました。

肝心のシンポジウムですが、DNA マーカーを用いた系統解析、系統地理が発表の多くを占めていました。全体的な印象として、複数の核マーカーや葉緑体の全領域を読むなど、やはり解析の情報量が増えているなど感じま

した。また若手研究者の発表では、中国南西部の横断山脈で進化したクッションプランツについて、標高差による形態・生態的変異を調べた話があり、色とりどりの美しい矮小植物と、標高 5000m にも達する高山帯での研究がとても印象的でした。私も日本の若手として、*Ainsliaea* (キク科)における溪流沿い植物の起源と適応進化について、10 個の核マーカーを用いて解析した結果を報告しました。発表後には多くの方々から声をかけてくださり、助言や共同研究の話をしていただきました。日中韓の植物分類の第一線で活躍しているシニアの研究者や、精力的な若手研究者と知り合うことができ、とても有意義な経験となりました。海外での学会発表は本当に刺激的で楽しいものですので、日本の特に若手の方々には、今後も積極的に参加されることをお勧めしたいです。

庶務報告 (2010年8月～10月)

庶務幹事 東 浩司

庶務報告では学会が交わした契約、転載許可、連絡、行った会議などで、ニュースレターの他の記事で紹介されていないものをお知らせしています。

・環境省と「平成 22 年度絶滅危惧植物の分布状況等調査業務」について契約書を交わした(10月 25 日)。

お知らせ

日本植物分類学会第 10 回大会, 2011 年度総会,

および East Asian Botany: International Symposium 2011 のご案内—
第 10 回大会準備委員会

日本植物分類学会第 10 回大会および日中韓 3 国シンポジウム East Asian Botany: International Symposium 2011 を以下のように開催いたします。今回は大会開催第 10 回を記念して上記の国際シンポジウムを併会します。

[会場]

筑波大学 大学会館 茨城県つくば市天王台 1-1-1 (シンポジウム, ポスター発表, 総会)

筑波大学第 2 学群食堂 (懇親会)

国立科学博物館 植物研究部棟 1 階会議室 茨城県つくば市天久保 4-1-1 (編集委員会, 評議員会)

[日程] 2011年3月18日(金)～3月21日(月, 祝)

3月18日(金) 午後 編集委員会, 評議委員会(国立科学博物館 植物研究部棟会議室)

3月19日(土) 午前 日中韓3国シンポジウム(英語),

午後 日中韓3国シンポジウム(英語), ポスターセッション(筑波大学
大学会館)(英語, 日本語)

3月20日(日) 午前 菌学会共同シンポジウム(日本語)

午後 ポスターセッション(英語, 日本語), 総会, 受賞記念講演(筑波大
学 大学会館)

夜 懇親会(筑波大学第2学群食堂)

3月21日(月, 祝) 午前 シンポジウム「日本の固有植物」(日本語)

午後 公開シンポジウム「植物の30億年の歩み」(筑波大学 大学会館)

[お問い合わせ先] 305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1

国立科学博物館 植物研究部 岩科 司

Tel. 029-851-5159 Fax. 029-853-8998

E-mail: biodiversity@kahaku.go.jp (大会専用)

本大会はこれまでの大会とは異なり, 第10回大会を記念して, 国際シンポジウム East Asian Botany: International Symposium 2011 を兼ねますので, 一般の口頭発表はありません。ご注意ください。なお, 英文でポスター発表なされる方は, 国際シンポジウムでの発表と同格に扱います。

[発表の要領]

○ポスター

ポスター発表用パネルのサイズは, 横90 cm × 縦120 cm 以内です。貼付用テープ等は大会準備委員会で用意します。ポスターの貼付は3月19日の朝, 撤収は3月21日の昼までとします。なお, ポスターはこれまで通り日本語でも可能ですが, 国際シンポジウムを兼ねるために, ポスター賞へのエントリー希望者は英語のポスターをお願いします。

○シンポジウムの口頭発表

発表は会場備え付けの設備を使用したMSパワーポイントによる発表に限定します。コンピュータの持込は可能ですが, 予備的にUSBフラッシュメモリにファイルを保存してお持ちください。

[発表・参加申込方法]

大会には, 日本植物分類学会の会員, 非会員を問わず参加できますが, ポスター発表に関しては, ポスター発表で話をする方は会員であることを原則とします。非会員の発表者のかたは当日までに日本植物分類学会への入会手続きをしてくださるようお願い申し上げます。

発表・参加申込みに関しては, 原則として電子メールで申込みをしてください。本ニュースレター19ページの「発表・参加申込書」に従って必要事項を記入し, タイトルを「大会申込み」として第10回大会専用アドレス biodiversity@kahaku.go.jp 宛てに添付ファイルで送信してください(添付ファイルは参加者本人の氏名をお使いください)。なお, 大会に参加される方は自動的に国際シンポジウムにも参加扱いとなりますので, 改めて国際シンポジウムの参加申込

みをする必要はありません。また、日本菌学会の会員の方は3月20日の菌学会との共同シンポジウムにのみ参加される場合は大会参加費が無料となります。送信してから3日間経っても（土日・祝日を除く）大会準備委員会から受信の返事がない場合は、タイトルを「大会申込み再送信」とした上で、同じメールを送信してください。電子メールを利用できない方は、別紙の「発表・参加申込書」に必要事項を記入の上、大会準備委員会あてに郵送またはファックスしてください。

[申込みの締め切り]

発表者：発表申込み・大会参加費振込 1月14日（金）（電子メールのみ）

発表要旨ファイル提出：1月28日（金）（電子メールまたは郵送）

発表者以外：大会参加申込み・懇親会申込み・参加費振込 2月28日（月）必着

1月14日までの振り込みは、参加費が割引になります。

[ポスター賞へのエントリー]

ポスター発表賞にエントリーされる方は「発表・参加申込書」11. ポスター発表賞へのエントリーの項目で「(1) する」を選択してください。なお、エントリー資格のある方は、日本植物分類学会の会員で（中国・韓国から参加される方を除く）、パーマネント・ポストに就いていない研究者で、筆頭発表者として実際にポスター発表される方本人です。なお、審査の対象になるポスターセッションは19日の17時からを予定しています。ポスターは必ず英語で表記してください。

[発表要旨]

発表要旨の原稿は必ずMS（マイクロソフト）ワードを用いて作成し、MS Word 2003（Windows）またはMS Words 2004（Mac）で読み込み可能な形式で保存してください。左右は2 cm、上下は3 cmの余白を取り、A4版の用紙1枚に12ポイントのTimes New RomanあるいはMS明朝のフォントのみを用いて、34行以内でタイプしてください。なお、ポスター賞エントリーの方および国際シンポジウム発表者の方は国際シンポジウム参加扱いとなりますので、必ず英語でタイプしてください。発表題目の左には発表番号を印刷するための余白（4 cm）が必要です。発表題目、1行空白、発表者氏名（カッコ内に所属）、発表者氏名（英語、ただし英語表記の場合は不必要）、1行空白、要旨本文の順に記入し、実際に発表される演者の右肩に「*」を入れてください。図や表も入れることは可能ですが、グレースケール原稿は印刷の際につぶれる恐れがありますので、できる限り避けて下さい。パソコンの機種に依存する特殊文字は、文字化けなどを起こす可能性がありますのでご注意ください。要旨はB5サイズに縮小して印刷・製本します。原稿のファイルは「発表要旨」とタイトルをつけた電子メールの添付ファイル（代表申込み者の名前全体をファイル名としてください）として、biodiversity@kahaku.go.jp宛てに送信していただくか、ファイルの入ったCD-Rを下記の住所まで郵送してください。送信してから3日経っても（土日・祝日を除く）大会準備委員会から受信の返事がない場合は、お手数ですがタイトルを「発表要旨再送信」として、同じメールを送信してください。

なお、印刷の都合で体裁を変更する場合がありますので、ご承知置きください。MSワードを使って要旨原稿ファイルを作成することができない発表者は、事前に大会準備委員会までご連絡ください。要旨のFAXによる送付は受け付けません。

[要旨ファイルの送付先]

305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1
国立科学博物館 植物研究部 樋口 正信
Tel. 029-851-5159 Fax. 029-853-8998
E-mail: biodiversity@kahaku.go.jp (大会専用)

[参加費送金先]

郵便振替口座番号：00180-0-781748

口座名義：日本植物分類学会第 10 回大会準備委員会

送金にはニュースレターに同封の振替用紙を使用し、必ず振り込み金額の内訳（大会参加費、懇親会費、弁当代、追加発表要旨集代）と、払い込み者が参加者と異なる場合は、参加者の所属・氏名を通信欄に記入してください。

[宿泊施設]

会場のつくば市、特につくばエクスプレスの沿線には多くの宿泊施設がありますので、各自でご予約ください。

[大会会場へのアクセス]

最寄りのバス停は「大学会館（前）」です。近隣に利用可能な駐車場がありませんので、公共交通機関かタクシーをご利用ください。

つくば駅（つくばセンター）～大会会場

つくばセンターバスターミナル 6 番乗り場から「筑波大学中央」行きあるいは「筑波大学循環（右回り）」に乗車。8 つめのバス停「大学会館（前）」にて下車（約 10 分、190 円）し、進行方向むかって右手すぐに会場があります。タクシーの場合、大学会館のバス停まで約 10 分、1,000 円前後です。

*バスは朝 8 時台には 10 分に 1 本程度ありますが、混雑が予想されますので、タクシーの乗合をおすすめします。

東京方面～つくば駅（つくばセンター）

つくばエクスプレス（TX）の場合、終点つくば駅で下車してください（秋葉原から快速 45 分、1,150 円）。

バスの場合、東京駅八重洲南口より「筑波大学」あるいは「つくばセンター」行きに乗車してください。「筑波大学」の場合、つくばセンターより 2 つ先の「大学会館」バス停で下車してください。「つくばセンター」の場合、終点つくばセンターにて乗り換えが必要です。バスは 1 時間に 2-3 本程度です。

東京方面～土浦経由～大会会場

JR 常磐線の場合、土浦駅にて下車（上野駅から特別快速 57 分、1,110 円）。土浦駅西口西 2 のバス乗り場から「筑波大学中央」行きに乗車、「大学会館（前）」にて下車（約 35 分）、進行方向むかって右手すぐにあります。バスは朝 8 時台には 15 分に 1 本程度あります。

(参考)

つくば駅～大会会場の 8 時台のバス（土日祝）

「筑波大学中央」08 23 28 38 40 53

「筑波大学循環（右回り）」00 40

[参加費]

大会参加費（発表要旨集 1 部の代金含む）

1 月 14 日まで 一般 4000 円 学生 2000 円

1 月 15 日以降 一般 5000 円 学生 3000 円

追加発表要旨集 1 部 1000 円

懇親会

1 月 14 日まで 一般 6000 円 学生 4000 円

1 月 15 日以降および当日 一般 7000 円 学生 5000 円

昼食弁当 500 円（お茶なし）（3/19, 3/20, 3/21）

弁当は予約制です。参加申込みの際に一緒に振り込んでください。

[昼食]

3 月 19 日, 20 日, 21 日のいずれも土日, 祝日ですので, 大学会館のレストランは休業です。近くにはレストランやコンビニはありますが, 多くありませんので, 弁当を申し込むか, 昼食を用意されることをおすすめします。

[日中韓国際シンポジウム]

3 月 19 日 (土) テーマ「Phylogeography of East Asian Plants」, 「Diversity and Evolution of East Asian Plants」(予定)

講演者: Invited speakers

[菌学会共同シンポジウム] (共催: 日本菌学会)

3 月 20 日 (日) 午前 テーマ「植物と菌類: 地下に展開する共生の世界」(予定)

講演者: 山田 明彦 (信州大), 成澤 才彦 (茨城大), 佐藤 俊博 (森林総研), 谷亀 高広 (鳥取大), 辻田 有紀, 齊藤 勝晴 (信州大) (予定)

[シンポジウム]

3 月 21 日 (月・祝) 午前 テーマ「日本の固有植物」(予定)

講演者: 柿嶋 聡 (東大), 常木 静河 (首都大学東京), 百原 新 (千葉大), 奥山 雄大 (科博), 海老原 淳 (科博) (予定)

[公開シンポジウム] (後援: 国立科学博物館, つくば市教育委員会)

3 月 21 日 (月・祝) 午後 テーマ「植物の 30 億年の歩み」(予定)

講演者: 井上 勲 (筑波大), 長谷部 光泰 (基生研), 山田 敏弘 (金沢大)

2010 年度日本植物分類学会講演会のご案内

講演会担当委員 篠原 渉

2010 年度の日本植物分類学会講演会を次のとおり開催します。なお, 会場は大阪学院大学の林一彦先生にお世話いただきます。

【日時】2010 年 12 月 18 日 (土) 午前 10 時~午後 4 時 40 分

【講演会場】大阪学院大学 2 号館地下 1 階 2 号教室 (02-B1-02 教室)

〒564-8511 大阪府吹田市岸部南 2 丁目 36 番 1 号 (電話: 06-6381-8434)

【プログラム】

- 10:00-10:05 ご挨拶
10:05-11:05 川瀬 大樹「日本の蛇紋岩植物」
11:15-12:15 川北 篤「コミカンソウ科における絶対送粉共生の起源と進化」
(12:15-13:20 昼食)
13:20-14:20 布施 静香「キンコウカ科(広義ユリ科)の系統」
14:30-15:30 嶋村 正樹「コケの精子が空を飛ぶーコケ植物の繁殖戦略の多様性ー」
15:40-16:40 星野 卓二「スゲ属植物の種内異数体における系統地理」

【その他】

講演会終了後、大阪学院大学職員食堂で懇親会を行います。

【会場までのアクセス】

JR 東海道本線岸辺駅あるいは阪急京都線正雀駅から大阪学院大学までともに徒歩 5 分。
HP の <http://www.osaka-gu.ac.jp/> の左側下の「キャンパス案内」から「交通アクセス」と「キャンパスマップ」をご覧ください。

【講演要旨(執筆は各演者)】

「日本の蛇紋岩植物」川瀬 大樹(岐阜県立大垣南高等学校)

特殊土壌である蛇紋岩地帯には多くの固有種や生態型が分布する。本研究は日本の蛇紋岩地帯特有の生態型と非蛇紋岩地帯での近縁種をもつアズマギク種内分類群、ササユリ種内分類群についてのそれらの集団遺伝構造を考察した。

「コミカンソウ科における絶対送粉共生の起源と進化」川北 篤(京大大学生態学研究センター)

コミカンソウ科の一部の植物は、ハナホソガ属の蛾の雌に送粉され、両者は密接な共生関係にある。世界各地での調査から得られた自然史、生態、多様性、系統についての理解をもとに、共生が歩んできた進化の道すじを辿る。

「キンコウカ科(広義ユリ科)の系統」布施 静香(兵庫県立人と自然の博物館)

キンコウカ科は、単面葉や子房半下位の属を含んでおり、形態的に多様である。系統的にも、例えばノギランの位置についてなど、議論をよんでいる。本講演では、キンコウカ科内の系統関係をはっきりさせ、形質進化についてお話しする。

「コケの精子が空を飛ぶーコケ植物の繁殖戦略の多様性ー」嶋村 正樹(広島大学大学院理学研究科生物科学専攻)

コケ植物は遊泳性の精子を用いた受精様式を維持しながらも、様々な繁殖戦略を進化させてきた。本講演では小動物による精子の運搬や、精子の空中への爆発的放出など、一般的にはあまり知られていない、コケ植物の受精に関する多様な繁殖戦略について紹介する。

「スゲ属植物における種内異数体の系統地理」星野 卓二(岡山理科大学総合情報学部生物地球システム学科)

スゲ属植物には種内異数体が多く種の種で見られ、その中には、遺伝的に安定した細胞型として広い分布域を持つものがある。葉緑体 DNA のハプロタイプの分析を行ない、染色体の異数化がどのように生じたかを紹介する。

会費納入のお願い

会計幹事 堤千絵

本学会の会費は前納制で、前年の12月末日までにお納め頂くことになっております。会員の皆様の会費納入状況はニュースレター本号の送付宛名の右下に「納済年度：○○○○」として示されております（自動振替をご利用の方は数字の代わりに「自動振替」と記入されています）。例えば、「2009」の方は2010、2011の2ヵ年分をお納めいただくことになります。この数字が2011未済の方は、2010年12月末日までに同封の郵便振替用紙にて、該当する金額を納入頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

- 年会費 一般会員 5,000 円, 学生会員 (※) 3,000 円, 団体会員 8,000 円
- 郵便振替口座 口座番号 00120-9-41247
加入者名 日本植物分類学会

本学会では自動振替をご利用頂けるようになっております。ご希望の方は、会計幹事までお知らせください。ただし、2011年度分の引き落とし申込み手続きはすでに終了しておりますので、ご利用は2012年度分からになりますので、ご了承下さい。

2010年度(2010. 1. 1-2010. 12. 31)をもって退会を希望される場合は、必ず2010. 12. 31までに会計幹事まで退会の旨をお知らせください。

その他、会費納入に関してご不明な点がございましたら、会計幹事(連絡先はニュースレター巻末)までお問い合わせください。

※2007年度第2回評議員会において、これまで必ずしも明確でなかった「学生会員」の取り扱いが明確にされました。例えば、学振DCの方は基本的に一般会員扱いとなります。会費振替用紙通信欄に指導教員のサインがない場合、学生会員とは認められません。不足分は未納会費として取り扱われますのでご注意ください。自動振替を利用されている学生会員の方は、前年度末(2011年度分については2010年12月末日)までに、指導教員から会計幹事宛に学生会員であることを承認する旨のメールを送信してください。

本の紹介

身近な草木の実とタネハンドブック

多田 多恵子 著 文一総合出版発行

11cm × 18cm 168 ページ 定価 1,800 円 + 税

ISBN978-4-8299-1075-7

身近に見られる222種の植物について、散布様式別に花・実・種子のカラー写真とわかりやすい解説で生態が説明されている。ページ数と掲載種数が盛りだくさんのため、入門編のハンドブックとしては若干高価な印象があるが、植物に興味を持ち始めたお子さんや一般の方が、野外で植物を調べるのに最適な内容とサイズである。
(東 隆行)



研究での失敗談

横田先生の体験談を読んで（1966年・西表横断の思い出）

飯尾 俊介（愛知県）

『ニュースレター No. 38』を見ていまして、横田昌嗣先生の「夢中の時にご用心ー野外での危険な目に遭わないためにー」が眼に止まりました。全文を読ませていただいて、突然50年前の体験が蘇ってきました。軍艦岩にやっとの思いで下り、稲葉の部落で命をつなぎ、星立までたどり着いた、まさにすさまじい体験が思い出されました。その時の記述が残っていましたので、お届けします。

8月14日、朝8時、私と寺下君の2名を乗せたボートは仲間川をさかのぼった。私達の乗っている舟は米軍のジェット機の燃料タンクを二つに割ったその上に船体を載せた双胴船である。水しぶきをあげ、軽快に川面を走っていく。川幅はすごく広い。兩岸は深いマングローブの森に覆われ、川幅を一層広く感じさせている。仲間川のマングローブ（紅樹林）帯は、ヤエヤマヒルギ、オヒルギが優先種で、メヒルギ、ヒルギモドキ、マヤブシキ等も良く見られる。それらの群落中には、ヒルギカズラ、シイノキカズラ、イトモ、イリオモテミズヒキモの類が入り込んでいる。1時間ほど上って、川はようやく真水に変わった。川幅はせばまり、マングローブ林に替わって、あたりにはイヌビワ、ガジュマル、フトモモ、アコウなどが普通に見られるようになった。ノヤシの群落が山合いに望まれた。サキシマスオウの板根が目につく。

私と寺下君は、舟を下りた。ゴザ岳を越え昼過ぎには白浜の部落へ着く予定だ。台風が近づいているという情報が入っているが、そんなに大変な行程ではないはずだ。だが、道は随分とぬかるんでいた。イリオモテヒメラン (*Maraxis bancanoides*) やトクサラン、そ

れにツルランが花を付けている。亜熱帯降雨林の鬱蒼と繁った中を進む。樹上はるかに、*Eria* (オオオサラン) の仲間と思われる着生蘭の幾つかが認められる。足元にはセマルハコガメがのそのそ這っていた。光の届かない樹下は下草も少なく、以外と歩きやすい。

登りにかかった。台湾ンコモチシダやタカラビなどが行く手をふさぐ。気候になれないせいか、すぐ疲労がくる。尾根に出たところで昼食にした。八重山営林署の避難小屋を過ぎ、しばらく歩いてゴザ岳頂上に着いた。頂上部は一面ゴザダケザサの純群落であった。森林帯との接線にはヤブレガサウラボシのコロニーが点在している。頂上からの眺めはすばらしかった。仲間川がゆったりと蛇行し、河口部で大きく海に開いている。尾根伝いに、かなりの起伏な道をだらだらと歩いた。非常に疲れた。頂から1時間程の所で大休止を取った。

再び下り始めた。ハテルマムルに出た。獣道のような道が幾筋にも分かれている。迷った。谷をしばらく下ったが、違うようでまたもとの地点に戻り、再度道を探った。どの道もすべて途中で消えている。5時。焦ってきた。森の彼方からチェン・ソーの音が聞こえた。しかし、方角が分からない。途方に暮れて、私達は谷を下り始めた。5メートル四方もある岩がごろごろしている。岩を滑り下りたら、決まって深い淀みが待っている。最初ぐしゃぐしゃと気になったキャラバンシューズの水もかまってはおられなくなった。足が棒のようになってきた。7時30分。急速に周りは暗くなる。川原の比較的平らな所へ荷物を降ろした。ここで野宿することに決めた。三つしかないあんパンの一つを二人で分け合った。水筒を取り出したが、水は数滴しか入ってい

なかった。ハテルマムルではまだ2リットル入りの水筒には八分方入っていたのに。谷を下るときの激しい振動で蓋が飛んでしまったのだ。タバコが吸いたくなかった。ポケットから取り出したマッチは汗でびしょ濡れである。辛うじて1本火が付いた。大切な火種だ。昨日縄文人の住みからしい洞穴を探検した折に使ったローソクが残っていたので、それに火をつけた。薪を集めた。ジャングルの中の木は、たとえ枯れ木でも、ぐっしょり水を含んで、とてもすぐには燃えるようなものではなかった。そのうち、ローソクの火も消えてしまった。

私達は2メートル程の間隔を置いて寝転がった。どうにも寝つかれない。空は曇って、真の闇夜である。光るものは馬鹿でかいホタルに、朽ち木に付いた発光菌だけである。その発光菌らしきものも、気のせいか少しづつ移動していくように見える。それが妙にハブの目のように見える。ものすごく恐ろしい。ヤマネコが飛び出してきそう。よく、孤独を愛するとか、弧高に生きるとか、呑気に言われる方がいるが、沢山の人に囲まれて、安全が保障されているという条件でのたわごとにすぎない。本当の孤独がいかに恐怖に満ちた耐え難いものであるか、体験してみられるがよい。私達は手探りで近づき合い、背中合わせになった。互いの温もりを確かめ合った。安堵の気持ちと昼間の強行軍の疲れで、いつの間にか、うとうととしかかった。

パラパラッと雨が落ちてきた。熱帯性の雨は凄まじい。たちまちバラバラッとものすごいのが棒のように落ちてきた。体は骨までぐしょぐしょだ。泥土が所構わずまつわりつく。

小降りになった。普通のスコールならこれでおしまいである。ところが、これは違った。台風の影響による雨だったのだ。簡単にやむ訳が無かった。5分とたたぬ間に、またもや降り出した。そんなことを繰り返していた。真っ暗闇の頭上をホタルが飛び交う。濡れた

眼鏡にそれが乱反射して、とてつもなく大きく見える。次第に雨の止み間が短くなり遂に本格的などしゃ降りとなってしまった。えい、どうにでもなれ。私たちはそのまま寝込んでしまった。それ程に疲れていたのだ。

突然、寺下君が「水が入ってきたぞっ。」と揺り起こしてくれた。上流からの濁流が背中を洗い始めていた。急いで、ずぶ濡れの荷物を少し高い岩の上に移した。そして、その横に座り込んだ。移動は全て、一瞬の雷光を頼りにした。雨は依然として私達を叩きつけている。だが、疲労には勝てなかった。

どれくらい寝たであろうか。気が付くと、あたりはほの明るかった。残ったパンを半分ずつ食べた。水は1滴もない。雨は、前にも増して激しく降りしきる。荷物をまとめて谷を下ることにした。岩の上はつるつる滑り、川は水量を増し、流れは急である。何度も腰まで水に漬かった。しばらく進んだところで落差20メートルを越す滝の上に出てしまった。全く、進退窮まった感じであった。こんな時、もがいてもどうにもなる訳でもない。算段のあげく、山を斜めにはって滝の下に降りることにした。人の入ったことのない亜熱帯降雨樹林は、一歩足を踏み入れると、もう身動きできなくなってしまう。雨の降る朝方はハブが最も活動し易い状況だ。生い茂るツルアダンの根元はハブの巣である。そんな中を死に物狂いでナタを振りながら進んだ。体力は完全にその限界に来ている。

どうやら滝の下にたどり着けたようだ。長湯から上がった時のように、ふやけきったぶよぶよの手は、傷だらけである。一面水に囲まれながら、喉は乾いてねばねばになっている。私たちは、ついに濁水をごくごく飲んでしまった。ものすごくうまかった。甘い味がした。足元にはペゴニアの1種(マルヤマシュウカイドウ)が、桃色の美しい花をつけていた。滝の下は前と全く変わらないどころか、

一層岩が大きくなって危険だった。大きな岩から足を踏み外し、首まで水につかった。近くの岩に手を掛けたが、水勢が強く押し流され、今度は頭まで水に沈んでしまった。やっとの思いではい上がったがリュックに水が詰まってずっしり重くなっていた。貴重なカメラやフィルムは全く使い物にならなくなってしまった。

この島全体、陥没地形で、450メートルの山だったら、0メートルまで下らないと平地には出ない。下っても下っても、いっこうに海に出ない。小さな島だと軽く見ていたことを大いに悔やんだ。このまま、また1泊しなくてはならないかも知れない。いやいや生きて帰れるかどうか、分かったものではない。不安は拡大され、かつての思い出がとめど無く頭をかすめ始めた。実際、今までにこんな気持ちになったのは始めてだった。岩を越え、水を渡り、延々と歩き続けた。

いつのまにか雨も、ほとんど気にならないほどの小降りとなってきた。どうやら谷を抜け出したように思った。浦内川へ合流したのだ。(後にこの地点を確認したらカンビレーの滝の下、マリウドウ滝の近くであることが分かった)しかし、水流の勢いはいっこうに衰える様子はない。山なみはとめどなく続く。水が岸いっぱい流れて、これまでのように岩を伝って歩くことさえできない。切り立った山肌を木にぶら下がりながら前進した。リュックや胴乱がツルアダンにひっかかってうまく進まない。水量の増した川は渦巻いて流れている。そんな中を1時間ほどはいづった。木を掴んでいる腕が次第に力を失っていった。遂に、力尽きて、デーンと2メートルばかり下に転落してしまった。腰をひどく打った。リュックは紐が引きちぎれ、胴乱は木の枝に引っ掛かったままである。眼鏡もどこかへふっ飛んでしまった。全く幸いなことに、落ちたところが平らな岩盤の上で、流さ

れずに済んだ。流れはだいぶ緩やかになっており、川幅も広がっていた。川も思ったより深くはなかった。眼鏡も水につかって岩の上に落ちていた。態勢を建て直し、足で深さを確かめながら腰まで水につかって、下っていった。川も比較的浅い。ずっと歩き易い。昼を少し過ぎた頃だと思った。(時計は昨夜の11時18分で止まったままだ。)川の中へ灰色のビニール管が入り込んでいた。私たちは天にも昇らんばかりに喜んだ。人がここまで来ているのだ。管はまだ新しい。私たちはそれを伝ってありったけの力を絞って駆け登った。すぐに低い尾根に出た。ゴザ岳山頂で見掛けたのと同じ、観測箱があった。しっかりした道も付いている。急に強い疲労を覚えた。続いて空腹が身体を締め上げる。しばらくして、人家が見えた。稲葉の部落へ着いたのだ。家が5軒ほど建っている。非常に粗末な作りだ。泡盛の空瓶が山になっている民家へ入った。主人は飯とうどんを出してくれた。子供が1人いた。4年生だと言う。私達が名古屋で使っている教科書会社の物と同じ教科書を読んでいた。命拾いをしたと感じた。

星立部落へ向かう途中の峠から見た浦内川は雄大で静かだった。租内の旅館へ入ったのが午後4時30分。翌日目を覚ましたのが午後2時少し回った所だった。その間、泥のように眠りこけていたのだ。

この旅館は、私達が世話になった年の6月に戸川幸男氏がイリオモテヤマネコの調査のために逗留された、マルマ旅館という宿屋だ。近年、西表島もすっかり変わってしまっていると聞く。マルマ旅館は今も営業しているだろうか。星立のナリヤランやコウトウシランは残っているだろうか。干潟のヤエヤマヤシやミミモチシダ、それにヤシガニはまだ健在だろうか。無性に訪ねてみたい気がするこの頃である。

いきもの便り

北硫黄島のコケ

内田 慎治 (広島大学)

北硫黄島は東京の約 1200 km 南に位置する無人島です (図 1)。2009 年 6 月に、北硫黄島のコケ植物相の調査に参加する機会を頂きましたので、ここに概要を記します。

小笠原諸島父島を 6 月 15 日午後 7 時に漁船で出発し、翌朝午前 4 時に到着。朝焼けとともにオレンジ色の光を浴びた北硫黄島が現れました。北硫黄島の面積はわずか 5.5 km² にもかかわらず、標高 792 m の榊ヶ峰を有します。急峻な山が丸ごと海中から突き出したような姿に圧倒されました。なにしろ、これまでコケ植物の専門家が上陸したことのない海洋島、ここなら自分にだって“新種”を見つけられるのではないかと、がぜん気分が高まります。着岸はできないので、ゴムボートに荷物を載せ換え、泳いで上陸です。海岸沿いは、岩場が多く、ハマゴウなどの海浜性植物が覆っていますが、コケ植物はほとんど見当たりません。まず、標高 200m のベースキャンプまで荷物をピストン輸送するのですが、めばしいコケは全く見当たらず、不安と疲労のみが募ります。しかし、調査を開始し、標高が高くなるにつれて続々とコケが出現し始めました。クサリゴケ科やヤスデゴケ科の樹幹着生種が続々出現し、小笠原諸島固有種であるオガサワラシゲリゴケ、オガサワラヤスデゴケも確認しました。標高 400 m 付近では同じく小笠原諸島固有種であるムニンシラ



図 2. オオサワラゴケの大群落

ガゴケが出現しました。600 m を越えた辺りからうっすらと雲がかかり雲霧帯となっており、三万坪と呼ばれている山頂付近(約 700 m)では、オオサワラゴケの大群落 (図 2) やキノボリツノゴケなどが樹幹を覆っていました。コケ植物は、雲霧帯のように湿度の高いところでは、他の植物の生葉上にも生育します。北硫黄島でも生葉上に生育する小笠原諸島固有種のオガサワラキララゴケが見られました。

5 日間の調査、採集を行い、持ち帰った標本を検討した結果、これまでに蘚類 12 科 17 属 18 種、苔類 14 科 21 属 44 種、ツノゴケ類 1 科 2 属 3 種を確認しています。ツボミゴケ属の一種とサンカクゴケ属の一種が日本新産種、もしくは念願の新種である可能性があり、現在検討中です。北硫黄島に生育するコケ植物の 9 割は、小笠原諸島と琉球列島を除く日本列島にも生育するものでした。残りの 1 割が、小笠原諸島固有種、小笠原諸島と琉球列島にのみ生育する種などです。他の生物群と比べ、コケ植物では小笠原諸島固有種は少ないようです。繁殖様式や進化速度の違い、形態的に区別できない隠蔽種の存在などが理由として考えられます。今後、海洋島のコケ植物の起源について分子データを用いた研究が導入することで、謎が解けるのではと期待しています。



図 1. 北硫黄島

日本植物分類学会第10回大会「発表・参加申込書」

以下の内容について、必要事項を記入の上、必ず電子メールでご送信ください。

宛先：日本植物分類学会第10回大会準備委員会

メールアドレス：biodiversity@kahaku.go.jp

1. 名前（日本語）：
2. 名前（英語）（姓，名）：
3. 所属：
4. 所属の短縮表記：
5. 所属の短縮表記（英語）：
6. 連絡先住所：〒
7. TEL：
8. FAX：
9. E-mail アドレス：
10. 演者としてポスター発表する（該当する番号を記入してください）
（1）する （2）しない
11. ポスター発表賞へのエントリー（パーマネントポストに就いていない人のみ可）
（1）する （2）しない
12. 懇親会
（1）参加する （2）参加しない
13. 全発表者氏名・所属（演者の右肩に*印）：
14. 全発表者氏名・所属（英語）
15. 現在求職中の表示の希望：
（1）希望しない （2）希望する
16. 演題（英語で発表される方は英語で表記）
17. 大会参加費（振込期日に注意すること）：
1月14日までに振込の場合 一般 4000円 学生 2000円
1月15日以降振込と当日申込の場合 一般 5000円 学生 3000円
18. 懇親会費（振込期日に注意すること）：
1月14日までに振込の場合 一般 6000円 学生 4000円
1月15日以降振込と当日申込の場合 一般 7000円 学生 5000円
19. 追加発表要旨集（1部1000円）： 円
20. 昼食弁当代（お茶なし）（1食 500円）：
3/19 円, 3/20 円, 3/21 円, 合計 円
弁当は予約制です。当日売りはありません。
21. 合計金額： 円
22. 振込郵便局名：
23. 振込日：

郵便振替口座名称：日本植物分類学会第10回大会準備委員会

郵便振替口座番号：00180-0-781748